OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ＜書評＞ Yann Laporte, "Gilles Deleuze, l'épreuve du temps.", L'Harmattan, Paris, 2005 |
| Author(s) | 小倉, 拓也 |
| Citation | 年報人間科学. 2009, 30, p. 211-216 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/5310 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

# Yann Laporte,

# *Gilles Deleuze, l'épreuve du temps.*

小 倉 拓 也

## はじめに

初期のベルクソン論から、『差異と反復』、『意味の論理学』、そして晩年の映画論にいたるまで、時間の問題はドゥルーズ哲学の特権的なテーマであったといっても過言ではない。ヤン・ラポルトの『ジル・ドゥルーズ　時間の試練』は、ドゥルーズの思考の中心に時間論を捉え、それを読み解こうとするものである。著者のラポルトは、本書以外に著作がなく、あまり素性を知ることはできないが、本書執筆時にはパリ第一大学（ソルボンヌ）に在籍し美学を研究していた。おそらく、若手のドゥルーズ研究者であることは間違いないだろう。フランスの若い世代の研究をレビューすることは、その水準を知るうえでも非常に有意義である。

ドゥルーズの時間論は、それが彼のキャリアをとおしてのテーマであるにもかかわらず、著作ごとに変奏を加えられており、一貫した理解を退けるものである。ジャン＝クレ・マルタンは、ドゥルーズ、に捧げられた美しい書物の中で、「ドゥルーズの哲学は、注解の作業にすすんで身をゆだねるような哲学ではない。実際、ドゥルーズの哲学が書物から書物へと繰り広げている多様体は、系譜学的な方法によっても、構造的な方法によっても解釈されるものではない」(1)、と書いている。

系譜学的にも構造的にも解釈不可能であるということは、われわれに、「テクストの文面に反してその哲学的な探求の試みを正当化す

るという困難」(2)を与えるだろう。ラポルトによると、それはすでにあるものをただ発見することではなく、つまり、あらかじめ決められた特定の目的へとただ向かうことではなく、錯綜し分岐した道に踏み込み、迷子になりながら進んでいくことであるという。これが、ラポルトが本書のタイトルに掲げる「試練／実験 épreuve」の含意するところである。われわれは、ドゥルーズの錯綜した時間論を分析するそれ自体錯綜したラポルトの記述を整理しながら見ていく必要がある。

## 全体の概要

ラポルトは、本書を通してドゥルーズの時間論を概ね著作順に追っていく。網羅的で焦点を絞りにくいラポルトの試みの力点を特定するのは難しいが、おそらく、ドゥルーズにおける時間を「出来事」の時間として読み解いていることは間違いないだろう。第三の時間からアイオーンへ、そして時間イマージュと時間の結晶へ。そこでは、前‐個体性や非人称性、そして潜在性と現働性の識別不可能性が、「出来事」と生成の時間との関係において読まれていく。そしてその中で、生成と創造のために不可欠なものとしての芸術の役割が強調されることになる。まずはラポルトの整理にしたがって、ドゥルーズの時間論をみていこう。

## 時間の三つの総合

「出来事」の問題は、『意味の論理学』において中心的に展開される。しかし、ラポルトは、ドゥルーズの時間論を読み解くのに、『差異と反復』からはじめなければならないという。『差異と反復』における時間の三つの総合は、ドゥルーズの時間論の基礎的な構図を与えてくれるものであり、とりわけ「第三の時間」は「時間という空虚な形式」(3)として、アイオーンへと繋がれるものであるからだ。しかし、ここでは紙数の関係からあまり詳しくは入り込まず、「第三の時間」に焦点をあてて簡単にみていこう。詳しくは『差異と反復』の第二章を参照されたい。

時間の三つの総合とは、それぞれ現在・過去・未来に関わるものである。第一の総合は、「生ける現在」であり、それは誕生しては流産する瞬間の継起を縮約することで、経験的な時間の土台を形成する受動的総合である。第二の時間の総合は、土台としての現在を可能にするための根拠であり、それは「純粋過去」「記憶 Memoir」と呼ばれる。これは、経験的な現在を可能とする超越論的な時間である。

この時間の二つの水準は、現働的なものと潜在的なものとにそれぞれ対応する。後者が差異を含み込んだ潜在的なものであるの対して、前者はその展開、つまり差異の抜き取りである。潜在的なものは現働化されたものとは類似しないのだが、常に展開され現働化さ

れた側からしか描かれない。つまり、現働的な現在と潜在的な過去は、無限の円環を描いてしまうのだ。ここで円環を解放すべく要請されるのが、未来としての第三の時間である。

潜在的な過去と現働的な現在の描く閉じた円環においては、何ひとつとして新しいものは生まれてこない。時間が新しいものを生み出すために必要となるのは、根拠でもなく土台でもなく、崩壊であり、究極的な反復である。時間の第三の総合は、脱根拠化によって相対的な円環を砕き、一切を絶対的に反復する。それは「未来の永劫回帰」と呼ばれる。この「時間という空虚な形式」の中で、一切はその都度、一度きりの回帰を永遠に繰り返す。この永劫回帰こそが、新しいものの／への生成を担保してくれるのだ。

## クロノスとアイオーン

三つの時間の総合は、ドゥルーズの時間論の基礎的な構図を与えてくれるものであったが、それらは『意味の論理学』において、「出来事」という問題を射程に入れながら、時間についての二つの見方へと変奏される。

ひとつめの見方は、クロノスとしての時間である。これは、物体の能動と受動の中にある、いわば常に生ける現在としての時間であり、土台を有し根拠づけられた、秩序的な時間のことである。現働的な時間であるクロノスは、〈同じもの〉の回帰としての物理的な永劫回帰の無限の円環を形成する。これは、時間の三つの総合における、第一の時間に相当する。

二つめの見方は、アイオーンとしての時間である。クロノスが、物体的な能動と受動の時間（現在）であるのに対して、アイオーンは、それら物体的なものの結果＝効果としての「非物体的」な時間であり、現在という定点を有さず、過去と未来へ無限に分割される、常に現在を逃れる生成であるという。というのも、絶えず変化していく生成は、固定された土台である現在を逃れ、常に過ぎ去り、常に来るべきものであるからである。それは永遠的な直線として描かれる「時間の空虚な純粋形式」（4）である。この直線的な形式としてのアイオーンは、クロノスが描く物体的な無限の円環を解放するものであり、まさに第三の時間に相当する。

ところが、アイオーンは単に第三の時間の言い換えなのではなく、『意味の論理学』において非物体的な「出来事」という問題を語るためのものとして用いられており、ラポルトはこの「出来事」としての時間を強調する。

非物体的なものの理論は、ストア派に由来するものであるが、ドゥルーズはその核心を「因果関係の切断」にあるとしている。つまり、原因は深層における物体固有の秩序を有し、結果＝効果は表面におけるそれ固有の関係を有するのである。クロノスが、「出来事」が物体へ受肉し、事物の状態の中で現実化した現働的な時間であるのに対して、「出来事」そのものは現働化された現在からは逃れ、過去と未来とに無限に分割される。生成としての純粋な「出来事」は、特定の物の状態において語ることはできないのである。このような

「出来事」においては、一切は現働化された〈私〉や自我の人称的な形式のなかに囚われることなく、非人称的で前‐個体的なもの、潜在的に多様なものとして存立する。そこでは、異質な諸セリーは、単一な現在に従属することなく、多様なままに発散していくことになる。

## 運動イマージュから時間イマージュへ

次にラポルトは、潜在的なものと現働的なものについて論じていくのだが、紙数の関係から、それは後の芸術の役割についての部分で簡単に解説するにとどめることとして、少しとばして映画論についての記述を見ていこう。

ドゥルーズは、その映画論の第一巻を『運動イマージュ』、第二巻を『時間イマージュ』と題している。これらの著作の中で、ドゥルーズは合理的な知覚‐行動の連動から時間が解放され、純粋に光学的で音声的な状況が露呈される事態を、映画という芸術の中に見出していく。

ドゥルーズにとって、単にこの世界の表象だけでなく、所与としてある物質さえもがイマージュである。そこでは物質と運動とイマージュは同一のものとして考えられる。こうした、絶えず動き続け全体の変化とともにある物質的な総体においては、いかなる主観も入り込んではいない。主観が導入されるのは、その中に身体的な中心が成立し、その中心にとっての合目的的なイマージュ以外が引き算されることによってであり、それが知覚と呼ばれる。

こうした所与のイマージュからの引き算としての知覚には行動が続くことになる。この知覚と行動が合理的に続き、有機的に組織されることを、ドゥルーズは戦前のハリウッド映画に代表させて運動イマージュと呼ぶ。ここでは、時間は感覚運動的な構図に絡めとられている。

しかし、戦後においてこの感覚運動的な構図は危機にさらされる。たとえばイタリアのネオレアリスモによって描かれたのは、戦争の後の廃墟を前に、ただ佇み、彷徨し、見ることしかできない人々の姿であった。そこでは、知覚の後に整合的な行動が続かず、知覚と行動の間で、人間はひたすら決定不可能な状態に置かれることになる。世界を有機的に組織する主観なるものは宙づりになり、「純粋な光学的音声的状況」(5)が露呈されることになる。このような時間イマージュにおいて、時間は感覚運動的な図式から解放され、整合的な行動へとは有機化されず、出来事の離散的な力がむき出しになる。

ラポルトは、このような映画論における時間を、『意味の論理学』における「出来事」と強く関連させる。つまり、時間イマージュにおいて知覚と行動の合理的な結びつきが解かれたのは、まさに因果関係の切断であり、そこで露わになった純粋に光学的で音声的な状況とは、有機的な事物の状態とは異なる「出来事」に他ならないというのだ。

それだけでなく、ドゥルーズが『意味の論理学』においてすでに「出来事」を「結晶のようなもの」であるとしていたこと(6)、アイ

オーンの時間を潜在的なものと現働的なものとの平面的な境界としての鏡として描いていたこと(7)などを強調しながら、ラポルトは映画論において完成をみるドゥルーズの時間論を『意味の論理学』との対応において読み解いていく。

## 芸術の役割

このように、映画論を『意味の論理学』との関わりで読み解くラポルトの関心は、特にそう言明されるわけではないが、おそらく芸術の役割を重視しているからであろう。ドゥルーズは『時間イマージュ』の中で、潜在性とその現働性とが区別されながらも識別不可能になる状況を、結晶や鏡に見出している。たとえば、多角にカットされた結晶や向き合う鏡においては、現働的な人物と、映し出されたその無数の潜在的イマージュが識別不可能になり、その潜在的イマージュが現働性を吸収してしまう。

このような事態を、ラポルトは『意味の論理学』にも見出すのである。ドゥルーズは『意味の論理学』で、現働性を逃れる時間としてのアイオーンを結晶や鏡によって描き、現働性から絶えず潜在的表面へと上昇することを、パントマイム師やダンサーなどの芸術的な営為によって表象しながら、「反-実現 contre-effectuation」(8)と呼んだ。こうした芸術的営為が、現働化された物の状態から潜在性を解放するのであれば、生成としての「出来事」の時間と芸術とは切っても切り離せないということになるだろう。

## 結論

以上のように論じながら、ラポルトは、ドゥルーズが錯綜した議論によって論じ続けた時間とは「出来事」の時間であると結論する。「出来事」の時間は、到来ではなく生成である。それは起源でもなければ終わりでもなく、その彼方でもなく、常に中間であり、絶えず新たなものを生み出して止まない。そして、それ自体創造的な生成の時間を描くためには、絶えず現働性から潜在性を解放する創造的な芸術が不可欠なのである。

## おわりに

見てきたとおり、ラポルトの試みは、ドゥルーズにおける時間を生成としての「出来事」の時間として読み解き、そのための芸術の重要性を強調することにあった。ドゥルーズの時間論の網羅的な整理は、やや深みに欠けるとはいえ、明快な構図を示してくれるものである。そしてラポルトのオリジナリティはやはり、『意味の論理学』における芸術的な営為を、また映画というそれ自体芸術であるものを、生成としての「出来事」の時間のために不可欠なものとして見る点にあるだろう。

しかしながら、網羅的な記述の代償なのか、ラポルトが『差異と反復』第二章後半部の精神分析的な記述や、『意味の論理学』の第二

三セリー以降の後半部を占める「深層の悪しきクロノス」についてあまり関心を払っていない点は批判的に指摘しておくべきだろう。それらの点は、ドゥルーズが、経験的で表象的な世界の根拠としての、矛盾とも思えるような無根拠的なものを提示する場面である。こうした無底の深層という審級は、ドゥルーズがその時間論において経験的・表象的な領野から遡及していく発生論的な存在論の究極的な地点なのである。そして、このような無底の深層をめぐる記述は、とりわけガタリとの仕事以降は見られなくなる。ラポルトはあまりにも簡単に晩年の映画論と初期の『意味の論理学』とを対応において読もうとするのだが、それはこのような後に記述されなくなる深層のテーマを十分に検討したうえでなされるべきではなかっただろうか。

しかしながら、ラポルトの不十分な点に対する批判にただ留まってしまってはいけない。われわれはむしろここから、そうしたドゥルーズにおける理論的な変遷を踏まえたうえで、ドゥルーズ哲学を読み解いていくべきだろう。ラポルトが最後に書いているように、われわれは新たな地図作成へと向かわなければならないのだ。ドゥルーズ自身そう書いているように、真理とは、あらかじめあるものをただ発見することではなく、むしろ様々な介入によってそれらを捻じ曲げながら、新たに創造されなければならないのだから(9)。

**註**

（1）Jean-Clet Martin, *Variations—La philosophie de Gilles Deleuze*, Paris, Payot, 1993, p.11.（『ドゥルーズ ／ 変奏』毬藻充他訳、松籟社、一九九七年、一一頁）。

（2）Yann Laporte, *Gilles Deleuze, l'épreuve du temps* , Paris, L'Harmattan, 2005, p.10.

（3）Gille Deleuze, *Différence et répétition*, Paris, P.U.F., 1968, p.148.（『差異と反復』財津理訳、河出書房新社、一九九二年、一七八頁）。

（4）Gille Deleuze, *Logique du sens*, Paris, Minuit, 1969, p.194.（『意味の論理学』（上）小泉義之訳、河出文庫、二〇〇七年、二八八頁）。

（5）Gilles Deleuze, *Cinema 2 – L'image-temps*, Paris, Minuit, 1985, p.8.（『シネマ＊時間イメージ』宇野邦一他訳、法政大学出版局、二〇〇六年、四頁）。

（6）*Logique du sens*, p.19.（『意味の論理学』（上）、三〇頁）。

（7）*Ibid.*, p.81.（同書、一一三〜一一四頁）。

（8）*Ibid.*, p.188.（同書、二七九〜二八〇頁）。

（9）Gilles Deleuze, *Pourparlers*, Paris, Minuit, 1990, p.172.（『記号と事件』宮林寛訳、河出文庫、二〇〇七年、二五三〜二五四頁）。